運河とその周辺地区

環境整備構想

1979

(仮称)
北運河研究会

目　次

はじめに 1

小樽市の概況と運河地区の位置づけ 2

小樽運河と臨海地区の歴史 3

小樽運河とその周辺地区の特徴 5

環境整備計画 10

環境整備計画のダイヤグラム 11

環境整備事業計画 12

小樽臨海部歴史的環境保全地区整備計画 14

道路環境整備計画 15

運河沿散策路環境整備計画 16

運河の浄化と修景計画 17

運河博物館とシティホールその周辺環境整備計画 18

出抜小路環境整備計画 19

お送り修景環境整備計画 20

ボートタワー環境整備計画 21

臨海埠頭公園環境整備計画 21

龍宮島環境整備計画 22

臨海とその周辺地区サイクリングロードネットワーク整備計画 23

手宮線SL整備計画 24

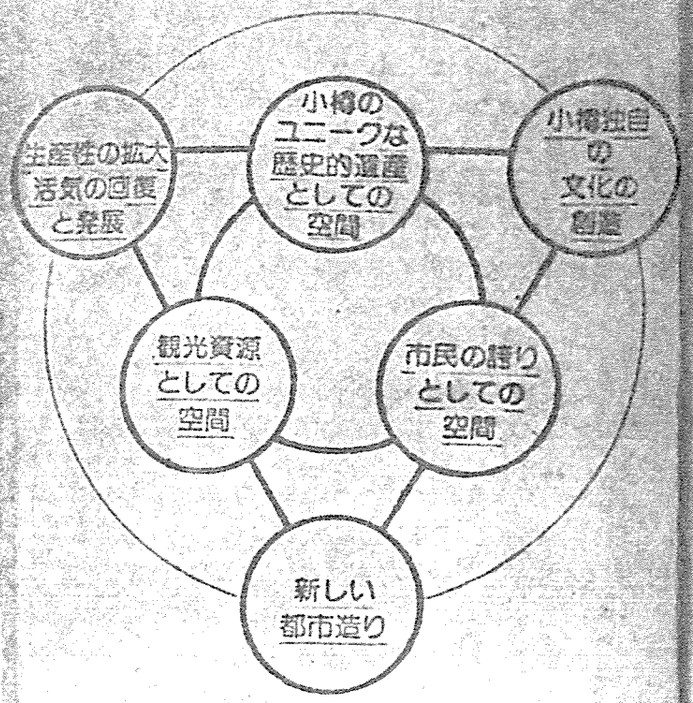
色内地区は、小樽の最も輝しい時代を代表する中心的地区であり、その意味では小樽の記念的都市空間である。
また、空間的にも、小樽の市街地の要の位置にあり、都市全体とのつながりの非常に強い部分である。
したがって、この地区の整備計画は、単なる市街地内の一地区の整備計画に留まらず、小樽全体の均衡ある総合的な都市づくりの中で位置づけられなければならず、新しい小樽のイメージへの飛躍の起爆剤としなければならない。

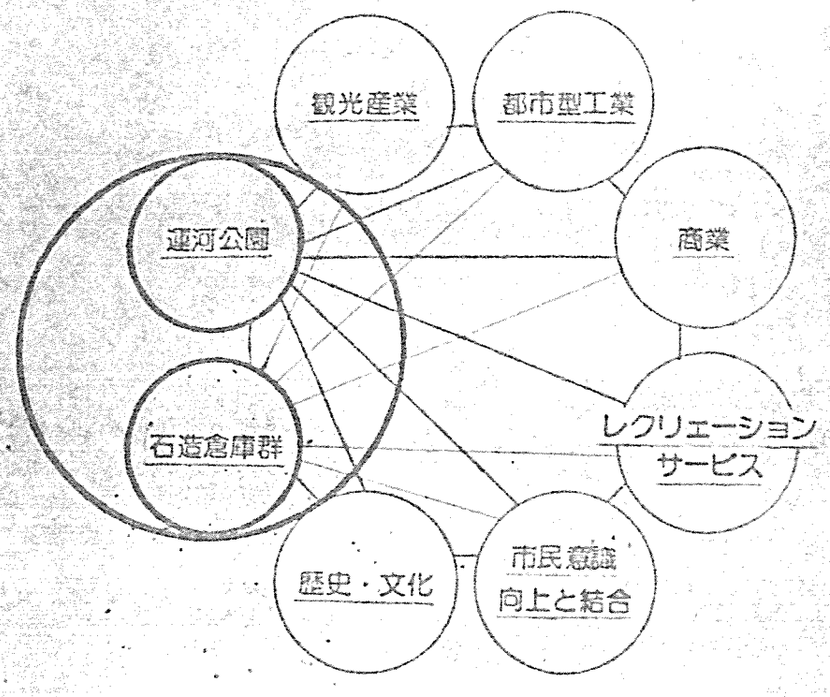
一方、この地区は今、古くさい衣がはげしく、新しい活力により再び生きかえることを強く望まれている。しかし、他方ではそこに潜んでいる歴史的文化的価値とその魅力を十分認識することが必要である。このようなことから、これらの2つの道を十分に認識しながらそこでの調和とそこから生まれる独自の新しい価値の創出が強く求められている。

そのため市民が求めている道路計画とこの地区の歴史的遺産の更生とを新しい次元で結びつけ、そこでの有機的結合をはかり1＋1＞2以上の効果をもつようとりはかる必要がある。

そのため
従来の機能的である産業機能を活性化しながら
他方で小樽市の都市景観の象徴として
市民と海とを結びつける媒介空間として
ユニークな景観をもった観光資源として
市民が憩い
市民が連帯し
市民が生きる
機能と空間の創造が望まれる

この空間はその歴史的、文化的価値を理解したにせよ
死んだ博物館となってはあまり意味をもたず
あくまで生きた都市空間として後世に引き継がれることが望ましい。





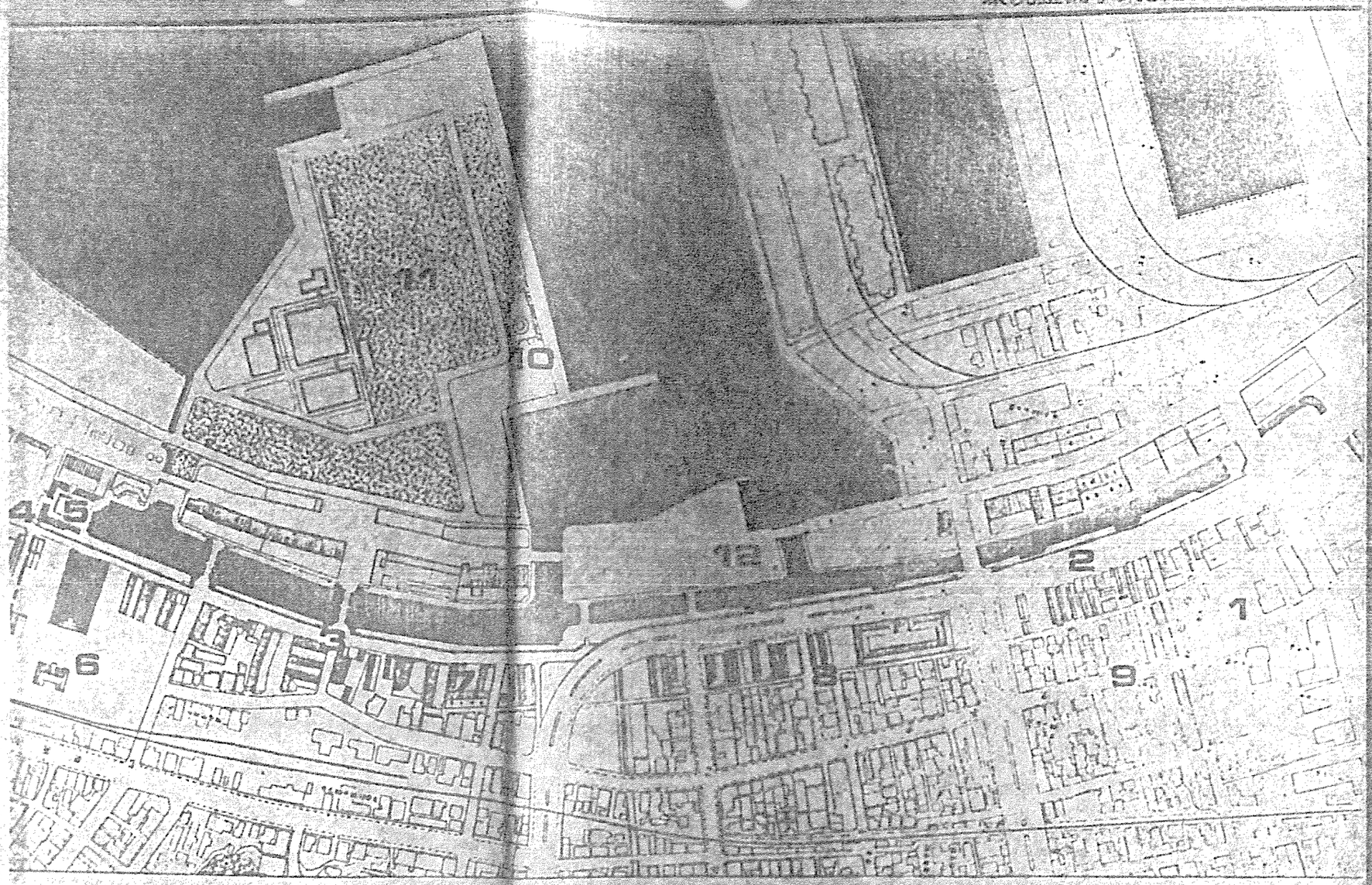
小樽運河とその周辺地区の
環境整備は
単に市内の一地区の環境整備計画にとどまらず
歴史的空間として
観光資源として
市民の誇りをもてる空間として
多角的に機能することになろう
また
そのことは
小樽の独自の文化の創造や
生産性の拡大につらなり
新しい機能のイメージ作りや
都市造り全体に大きな役割を果すことになろう

このため
運河公園及びその周りの石造倉庫群は
観光産業
都市型工業
商業
レクリエーションサービス
等と深く関わり
また市民の
歴史や文化に対する認識を深め
市民意識の向上と結合
をはかることにもなってゆく
ことになろう

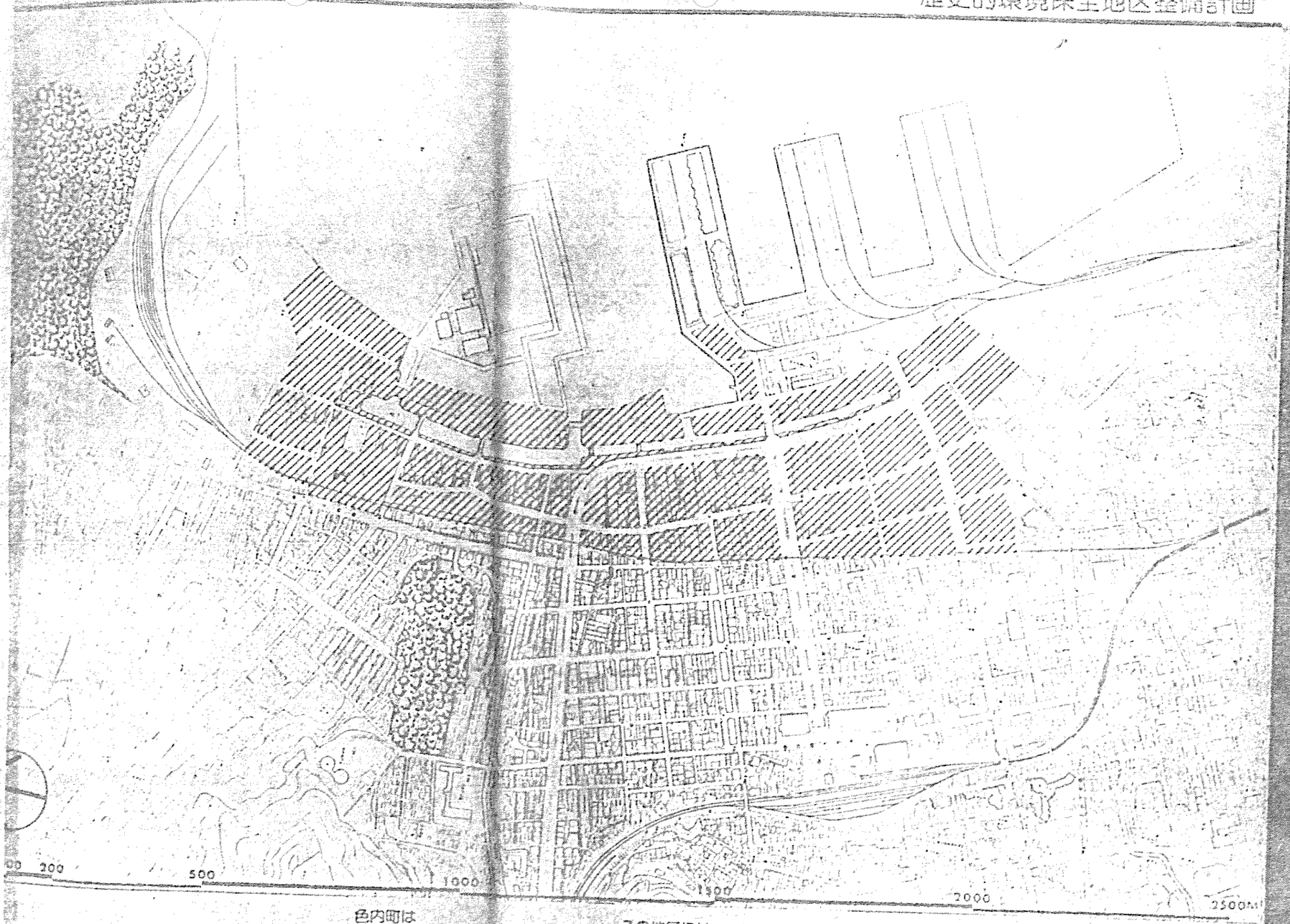
小樽運河とその周辺地区
(小樽運河公園地区)
環境整備計画

環境整備事業
- 水の浄化
- 道路整備
- 運河沿散策路整備 …… ベーブ・彫刻・ベンチ・外灯等
- 公共的建築施設の整備 …… シティホール・博物館・休息所・案内所・駐車場
- 半公共的施設の整備 …… 貿易センター・外国商品見本市
- 民間によるサービス施設の整備 …… ホテル・商店・朝市

イベント
- 記念事業
  - 鉄道百年記念事業
  - ナホトカ航路
- 年間事業
  - 運河祭り
  - 潮祭り
  - 見本市
  - 港祭り
- 月・週事業
  - 市民講座（歴史・文化）
- その他の事業



1 小樽色内町歴史的環境保全地区整備計画
2 道路環境整備計画
3 運河沿散策路環境整備計画
4 運河の浄化と修景計画
5 運河博物館環境整備計画
6 シティホールとその周辺環境整備計画
7 倉庫群の修復及び環境整備計画
8 出抜小路環境整備計画
9 本通り修景環境整備計画
10 ポートタワー環境整備計画
11 色内埠頭公園環境整備計画
12 龍宮島環境整備計画
13 サイクリングロードネットワーク整備計画
14 手宮線SL整備計画



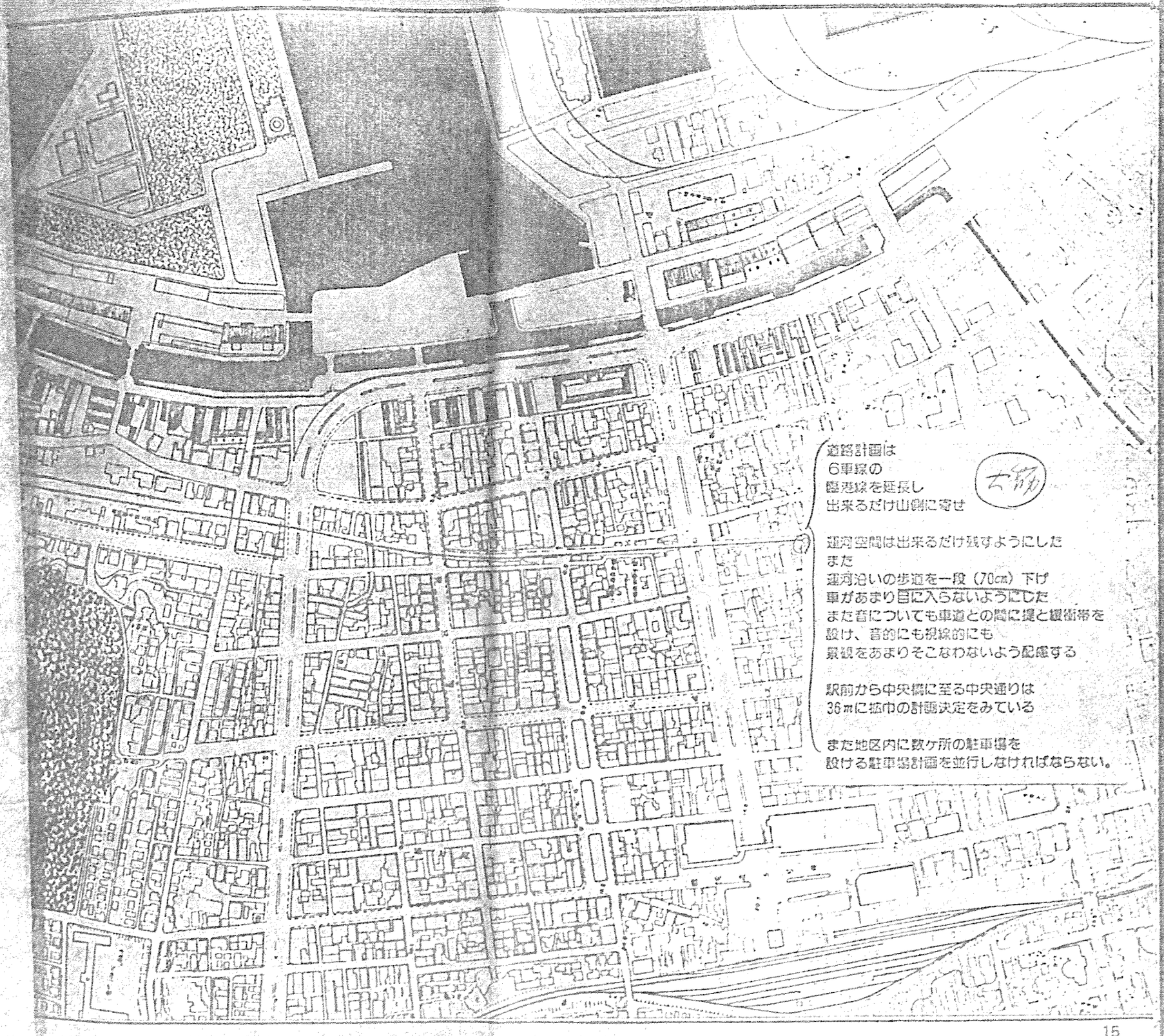
色内町は
明治の中頃から
市街地が形成されたところであり

明治の後期から
大正、昭和の初期
にかけ
小樽の最盛期に
その中心であった

この地区には
明治から昭和初期の
建築が密集し
わが国でもユニークな
独特の都市空間を形成している

このため
この地区の建築物によって
作り出される歴史的空間を

市と
住民と
市民が
一体となって
独自の
保存計画をたてる必要がある

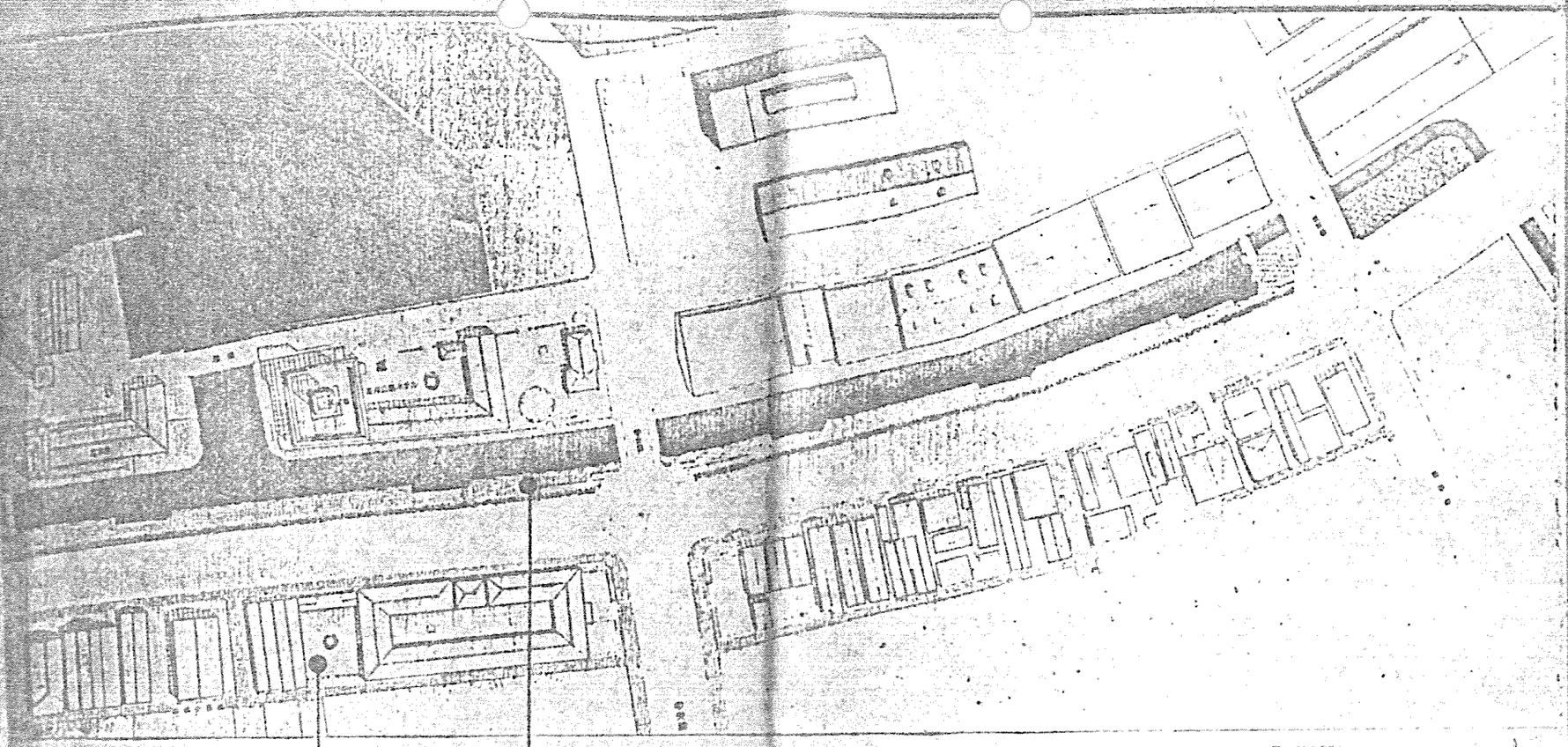


道路計画は
6車線の
臨港線を延長し
出来るだけ山側に寄せ

運河空間は出来るだけ残すようにした
また
運河沿いの歩道を一段（70㎝）下げ
車があまり目に入らないようにした
また音についても車道との間に堤と緩衝帯を
設け、音的にも視線的にも
景観をあまりそこなわないよう配慮する

駅前から中央橋に至る中央通りは
36ｍに拡巾の計画決定をみている

また地区内に数ケ所の駐車場を
設ける駐車場計画を並行しなければならない。



運河の水辺は
刻々と変る周りの影を映し
小樽の情緒を映す

そんな水辺を
楽しく散策できるような
ペデストリアンウェイ
（歩行者のための散策路）を
運河の周りに造る

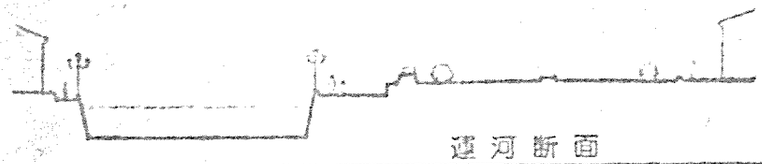
車の通れる一般の路面から一段低くし
水辺に近く
給つなぎのボラドスなどが並び
水辺に外灯がつく

ベンチが並び
露店が出
彫刻が立つ

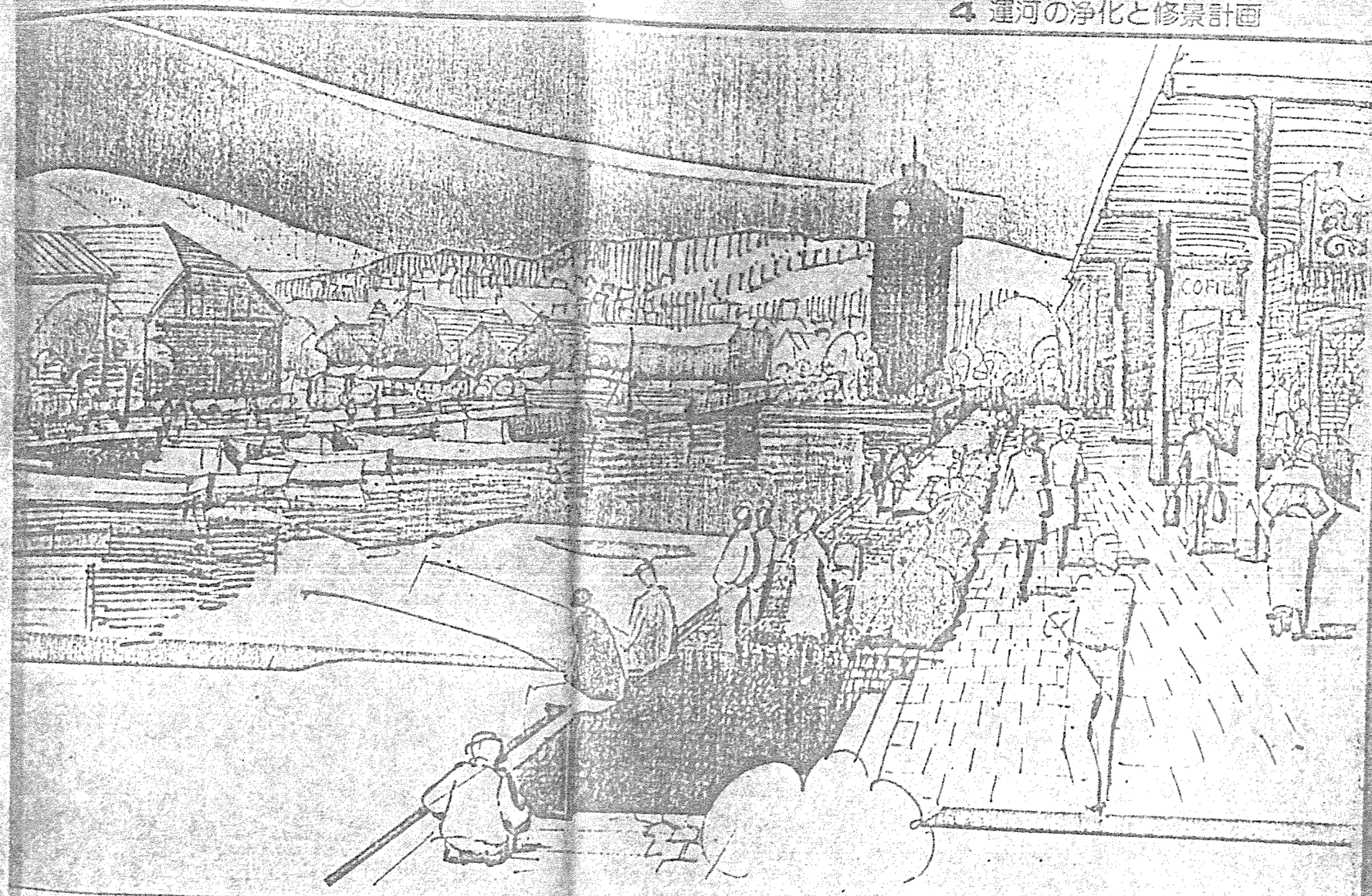
人々が眺め
おしゃべりをする
キャンバスをかけたイーゼルが立ち
シャッターが切られる

市民と
小樽を訪れる人々と
一体の場がそこにある

ここは
小樽を知り
その個性と歴史を語る
そんな空間である



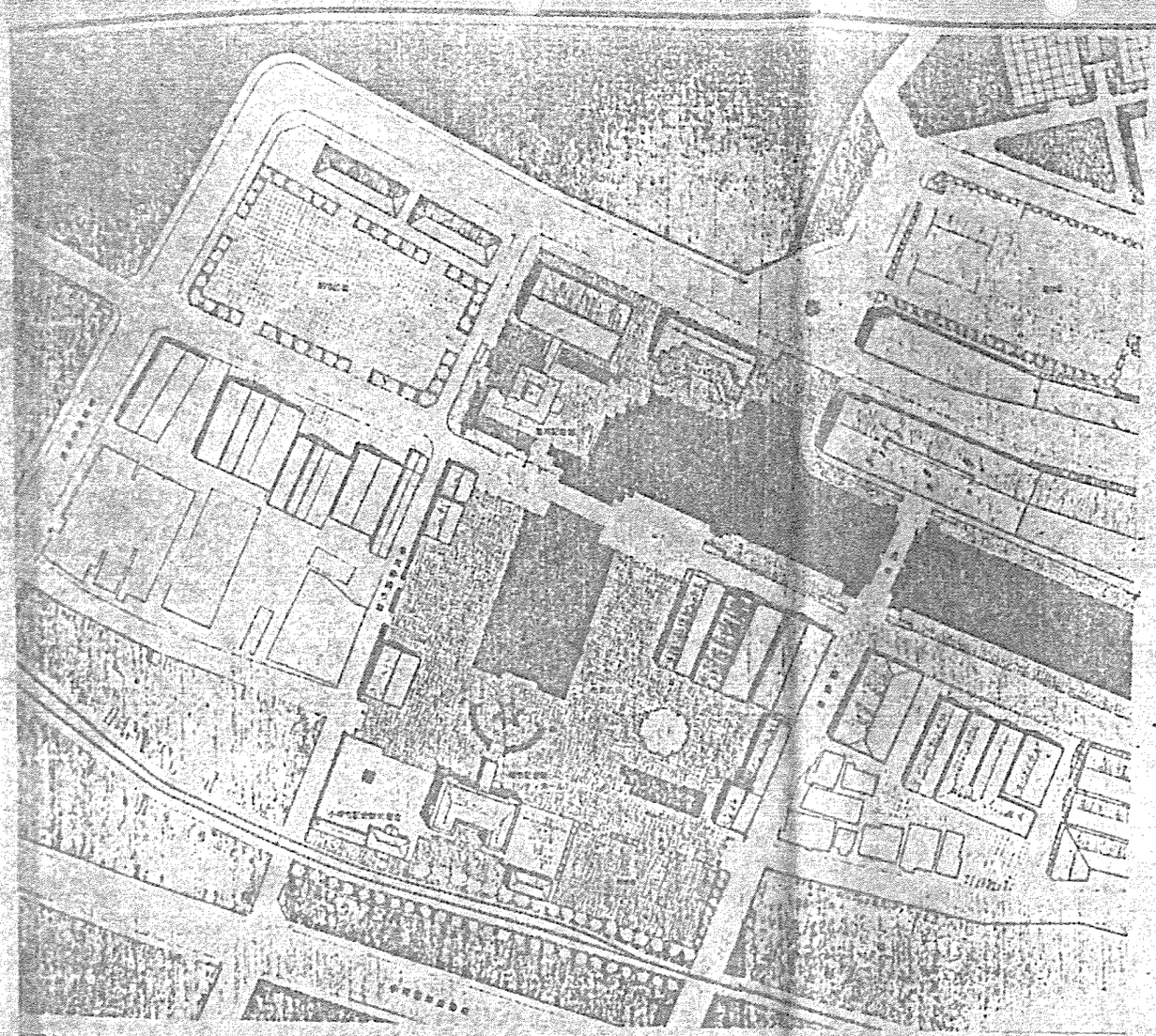
運河断面



運河は現在
長い間に浅くなり
汚泥が沈でんし

匂いを放ち
メタンガスを出している

人々の集まる運河公園は
流れ込む川の水を浄化し
河底を浚渫し
魚の生める
美しい運河の水を保つことが望まれる



の況り当りの景観は大事である
運河の正面にランドマークがない

では、運河博物館を運河のつき当りに
ンドマークとして
を受け止めるために設ける

の役能は塔であり
周のさまざまを知る
な博物館とする

の周りには
を改造するなど
いろいろな博物館がほしい

歩きながらそれらを訪れる楽しみが
そこにある。

ここはその1つの拠点なのだ。

その近くにレストハウスを置く
ここで人々は
ゆっくりと水辺の影を眺める

冬の運河の情緒もそこでは美しい

● 今の小樽博物館は
かつて日本郵船の建物であり
小樽の輝かしい歴史の1頁を物語っている

この建物を中心に
その周辺の環境整備と併せ
市民のための
広場
と
シティホールの整備をはかる

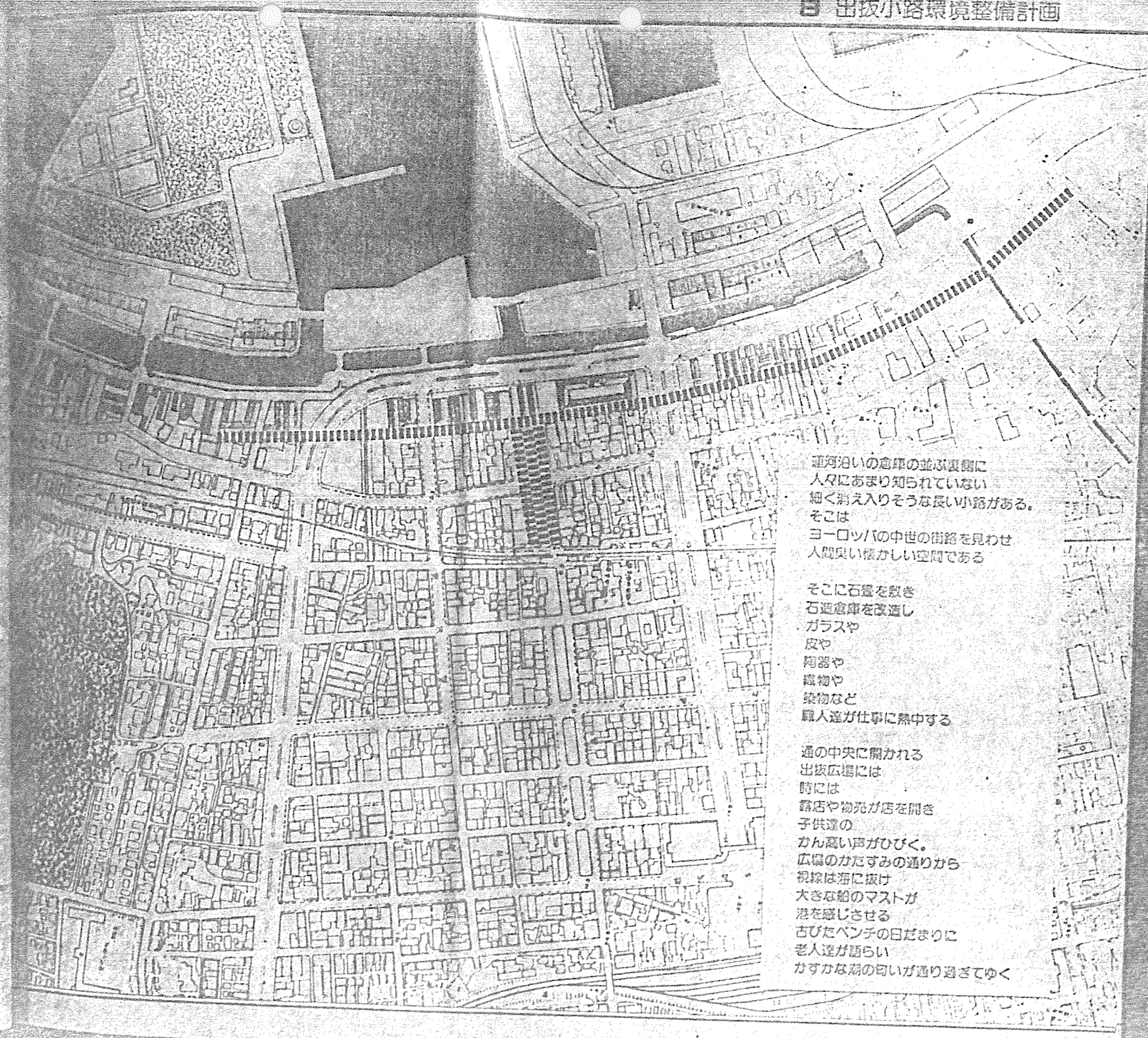
その建物の前面には
かつて
運河があった
その運の情景を復活し
広場と水のアンサンブルを作る

シティホールは
市民と語らい
人々を迎え
小樽の歴史を伝える
そんな場として設けられる

この事業は運河公園に通じ
運河周辺の環境整備にインパクトを与える
そして
この地区の今までのイメージを変える
そこはかつての小樽と色内の
栄光の場として復活する

そして
サイクリングロードやSLなどの線と
有機的に結合される。

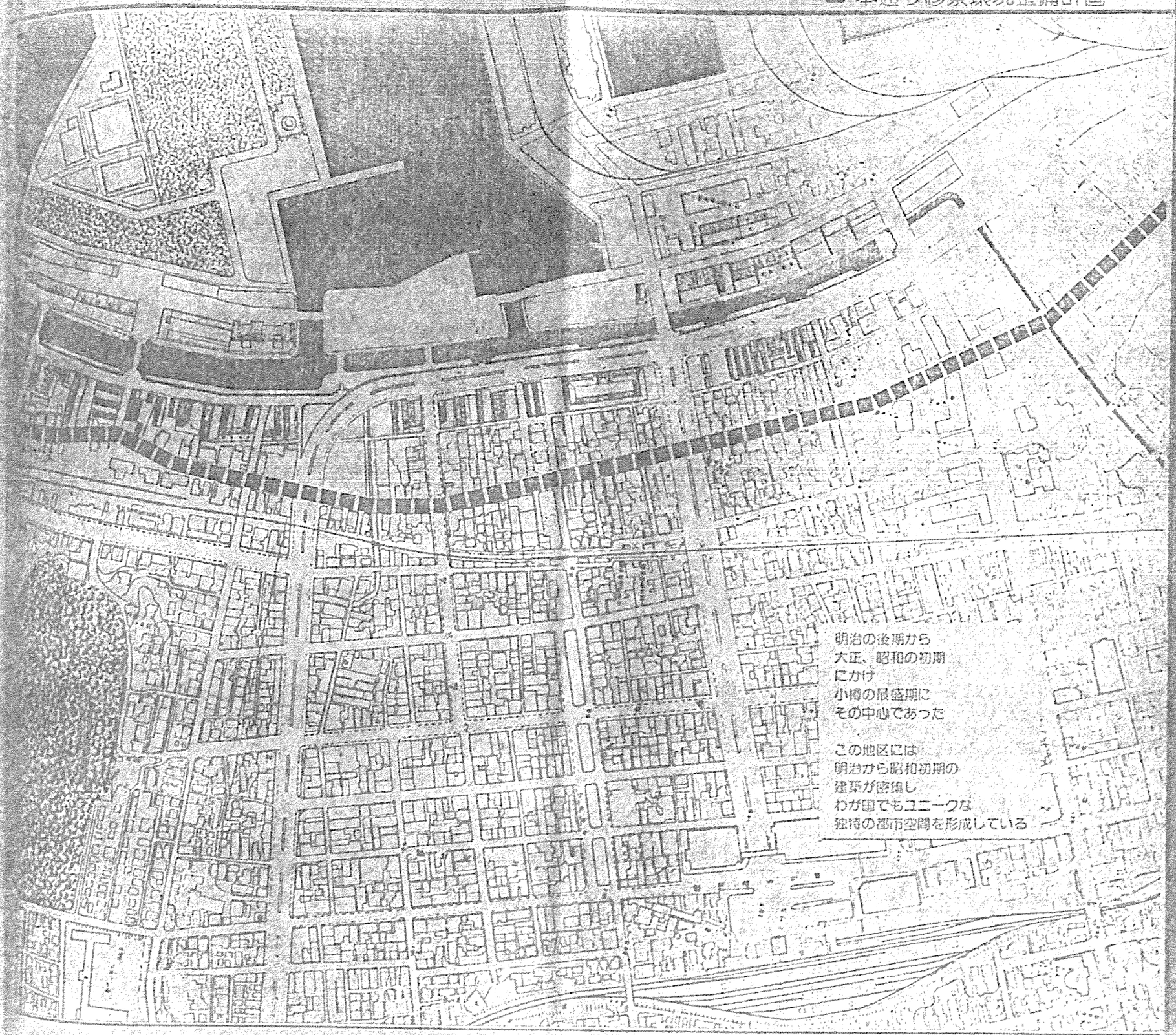
⑧ 出抜小路環境整備計画

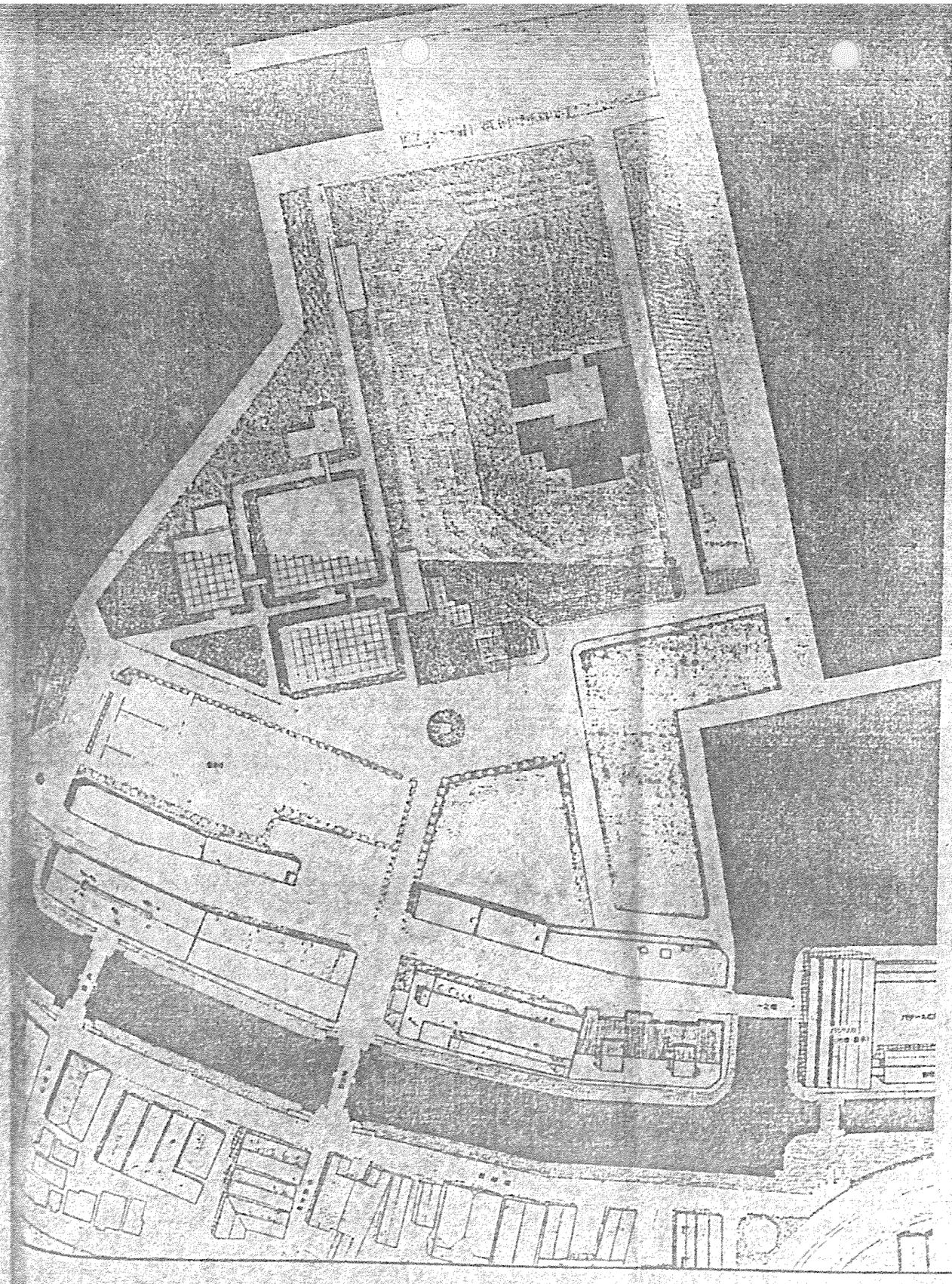


運河沿いの倉庫の並ぶ裏側に
人々にあまり知られていない
細く消え入りそうな長い小路がある。
そこは
ヨーロッパの中世の街路を見わせ
人間臭い懐かしい空間である

そこに石畳を敷き
石造倉庫を改造し
ガラスや
皮や
陶器や
織物や
染物など
職人達が仕事に熱中する

通の中央に開かれる
出抜広場には
時には
露店や物売が店を開き
子供達の
かん高い声がひびく。
広場のかたすみの通りから
視線は海に抜け
大きな船のマストが
港を感じさせる
古びたベンチの日だまりに
老人達が語らい
かすかな潮の匂いが通り過ぎてゆく


明治の後期から
大正、昭和の初期
にかけ
小樽の最盛期に
その中心であった
この地区には
明治から昭和初期の
建築が密集し
わが国でもユニークな
独特の都市空間を形成している



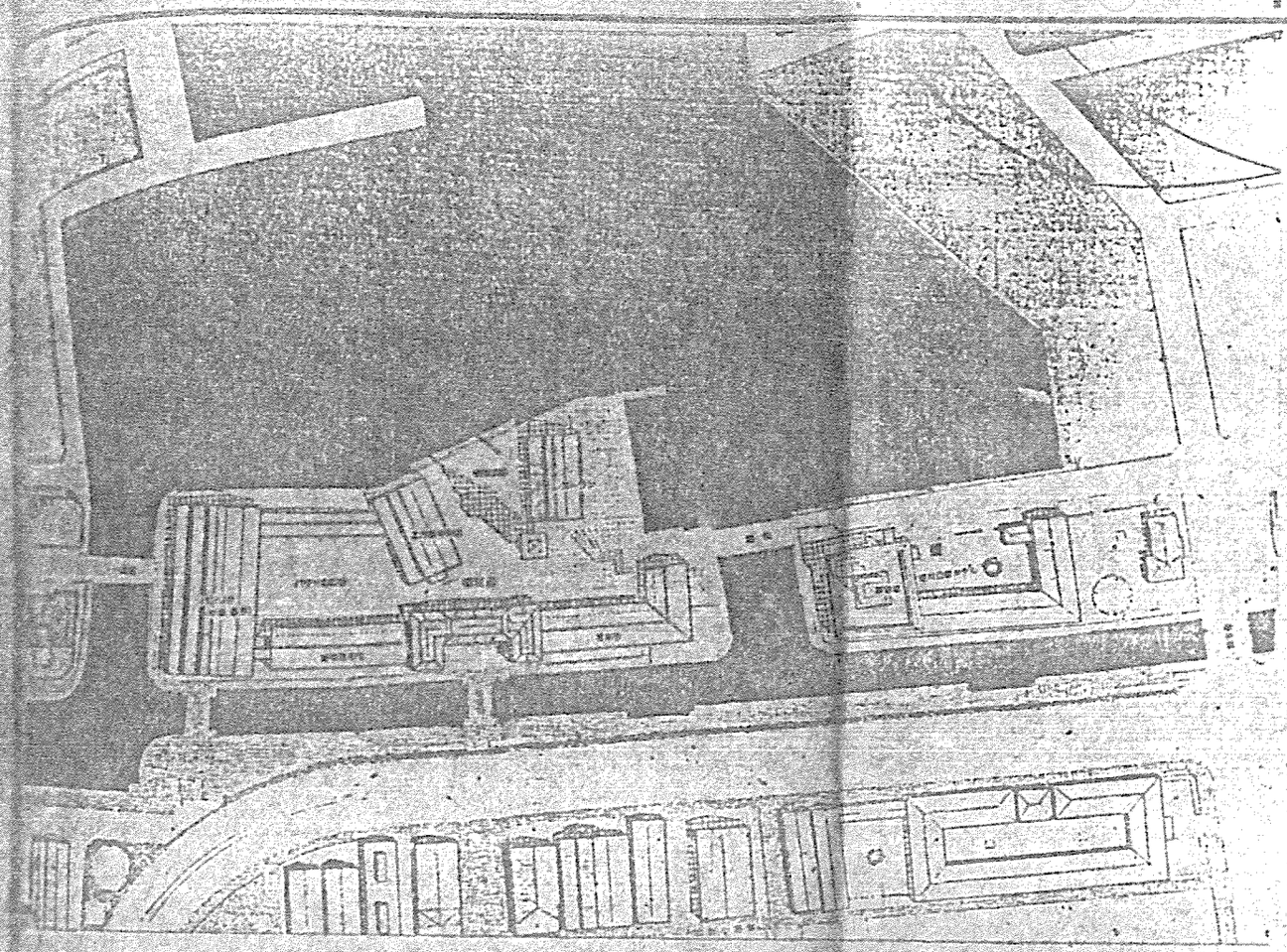
10 ポートタワー環境整備計画
11 色内埠頭公園環境整備計画

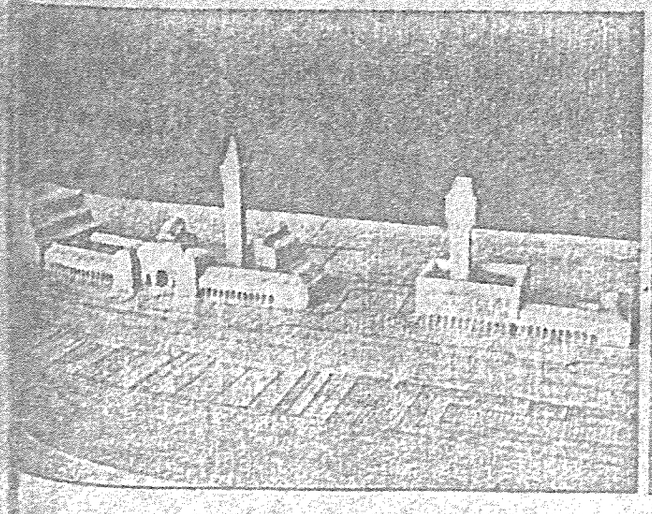
色内埠頭の埋立てによって生まれた
この人工の大地は
中央下水終末処理場のエアレーションタンクの
上部を使い
湖に開けたその上の
広々としたスペースを
小樽市民の海辺の公園として整備する

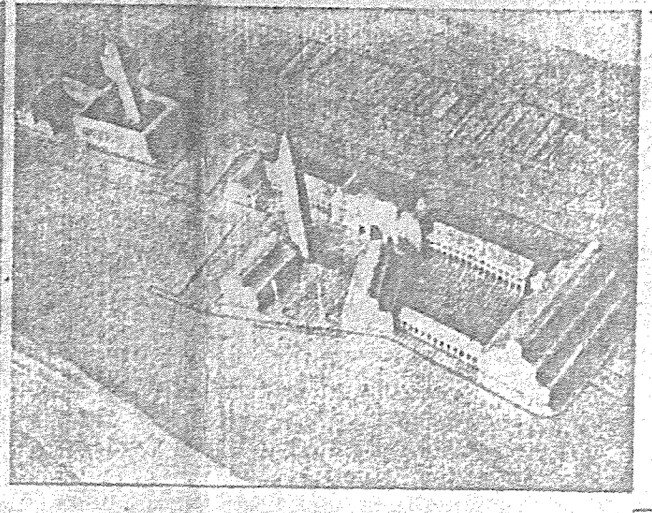
ここでは「潮まつり」の花火や
盆踊りの広場となる
そのほか
市民の運動会や
野外の展示や
野外のショーなどが行われる

その一角に
ポートタワー(マリンタワー)を設けよう

100mの展望台は
小樽の港と街を一望することができ
街の中からは港のランドマークとなる
港の景観のポイントを作る
小樽に来た人は
ここに寄らずには帰れない







運河をへだてた向う側に
いくつもの埠頭が海につき出している
それはかつて
海を埋立ててつくられたものであり
大きな埠頭に成長したものであった
今も色内埠頭が埋立てられつつある
そんな中に
ただ一つ成長からとり残された埋立島があった。

それは龍宮橋により市街地に続き
龍宮通りを上り、龍宮神社の石段へとつながっている

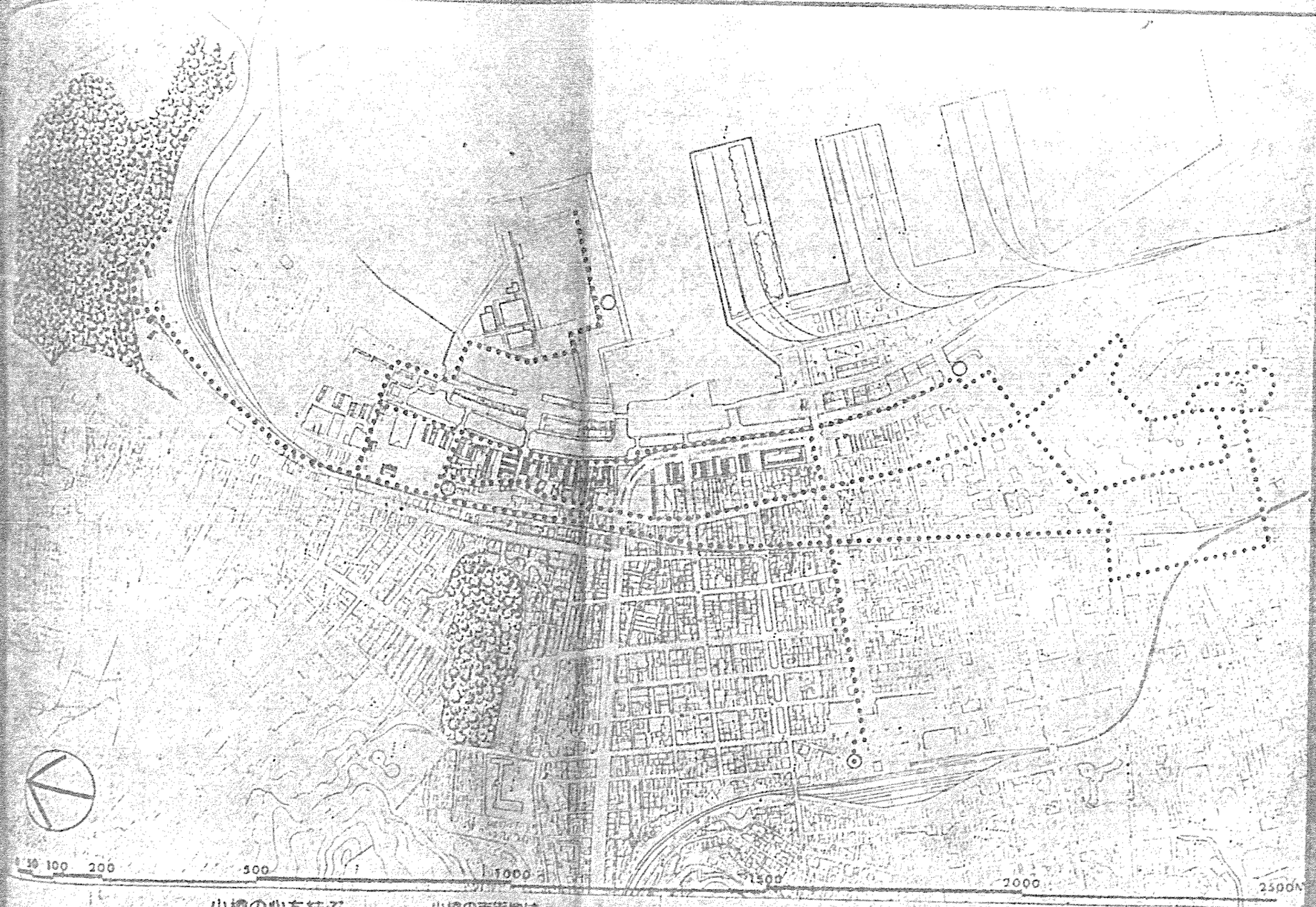
今その島には名前はない
だからこれを龍宮島と名づけよう

この島を小樽の港と貿易のセンターにしよう
そして市民や道民と海との出合いの場にしよう
また遠く離れた外国との出合いの場にしよう
それは北海道の出島であろう

そこは常設の見本市や
海外の雑貨の即売場であり
商品のショールームである

大きなバジリカ風の屋根の下に
海に臨む野外石張のテラスに

人々は集まる
小樽の活気がボルテコの空間に響き渡る



小樽の心を結ぶ サイクリングロードの ネットワーク

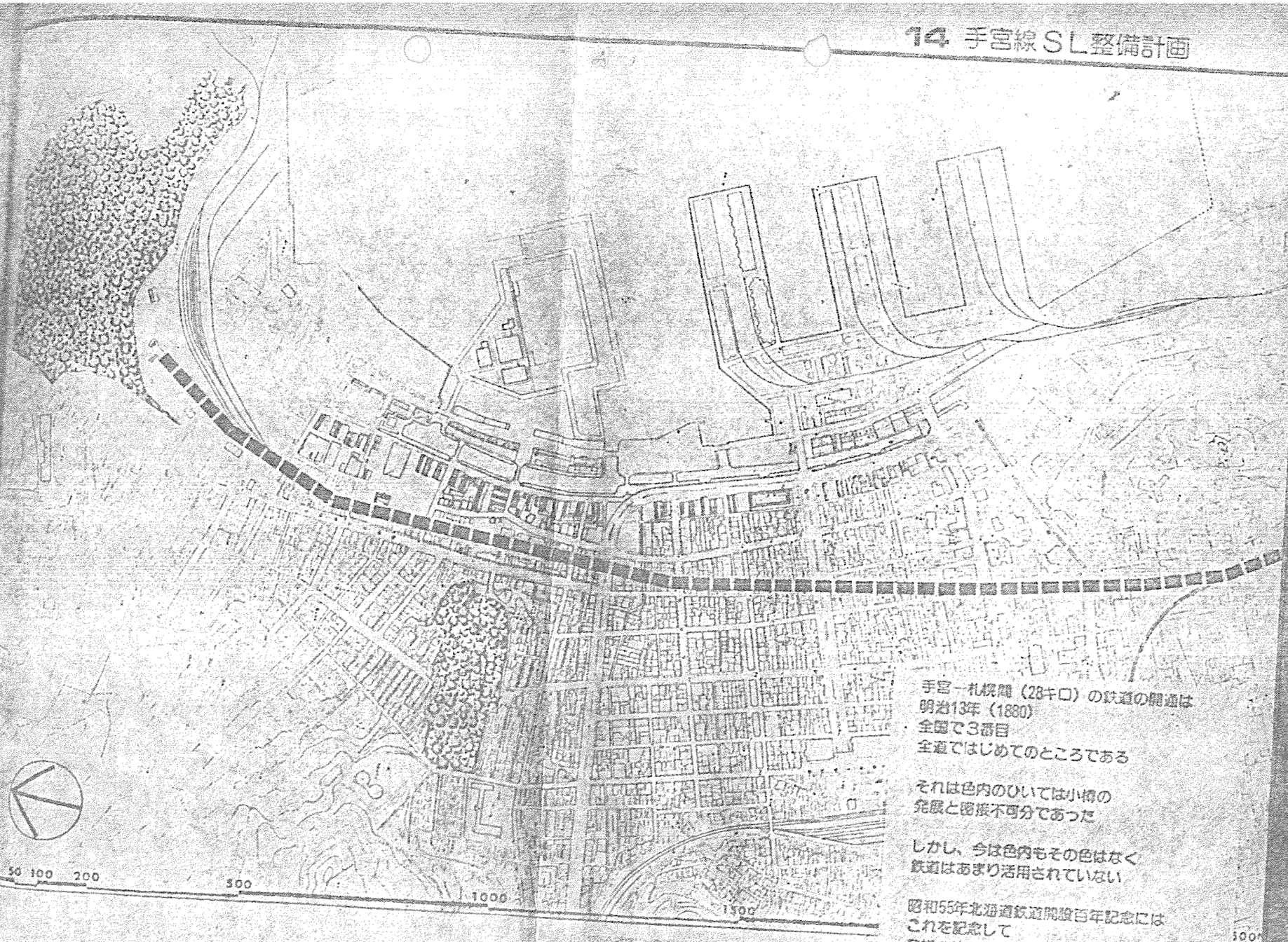
小樽の市街地は
比較的コンパクトな街である
どこへでも
歩いて行けそうな街である

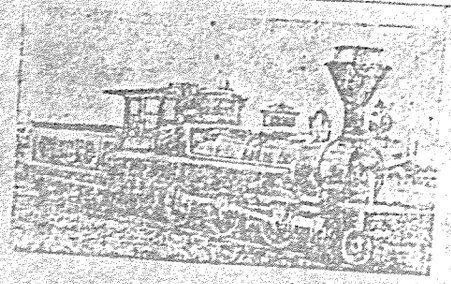
そんな街のあちこちに
歴史の跡がばら散かれている

また、小樽の道は道巾が狭く
坂が多い。
しかし運河の周りは平坦である

自転車は
そんなところに似つかわしい
若者達が、家族づれが
そして観光客が
自転車で
古代文字や博文館や文学館や
港の見える丘などをめぐり

自転車は
海と港と人々を
そして小樽の街と人々を
結びつける
そこで
そこで人々は
小樽を知り、小樽にひたる
自転車のためのそんな
ネットワークが必要である





よしつね号

手宮ー札幌間（28キロ）の鉄道の開通は
明治13年（1880）
全国で3番目
全道ではじめてのところである

それは色内のひいては小樽の
発展と密接不可分であった

しかし、今は色内もその色はなく
鉄道はあまり活用されていない

昭和55年北海道鉄道開設百年記念には
これを記念して
発祥の地手宮線に

SLを走らせ
市民と観光客の足にしよう
これは
全道の事業でもあり
その為も
運河公園の重要な交通機関として
再び
市民の人気者にしたい。